

第1分科会 「市民参加の図書館づくり」

司会者：森泉浩行（市立小諸図書館長）
発表者：矢崎智義（茅野市図書館プラントウ委員長）
山本美都子（NPO 法人上田図書館倶楽部）
西入幸代（NPO 法人上田図書館倶楽部）



1 発表の概要

(1) 矢崎智義（茅野市図書館プラントウ委員長）

2003年、図書館に併設していた美術館の移転が決まり、その空きスペースを図書館とする方針が出された。当時の市長はパートナーシップのまちづくりを標榜しており、「どんな形の図書館にするか」市民に考えてほしいと市民など22名が集められ、図書館基本計画策定委員会ができた。この会は、普通の市民が「図書館とは何をするとところか」という問題に、市民と職員とが一緒になって議論や話し合いだけではなく、課題解決型QC手法を取り入れ、アンケートの実施など「作業」で結果を出していたのが特徴である。

2005年の7月に茅野市図書館はリニューアルオープンを迎えた。策定委員会での方針を取り入れて滞在型の図書館を目指した整備をしたところ、利用者は2割程度増加した。

リニューアルはしたものの、引き続き図書館の「あるべき姿」を目指す過程の課題を解決していく方を盛った実施計画を、策定委員会が母体となってできた茅野市図書館プラントウが策定。「民主主義を守るための情報拠点、レファレンスの充実、市民も参画した選書」の3つの重点課題を解決するため、イベントや講座を開催している。プラントウとしての活動は人数が減るなどの課題もあるが、プラントウで議論した理念が茅野市総合計画の施策として組み込まれるなど行政側からも評価されており、更に活動を展開していきたい。

(2) 西入幸代・山本美都子（NPO 法人上田図書館倶楽部）

平成14年上田情報ライブラリーの運営基本計画が策定され「サービスを高いレベルで維持していくため、専門性が高く意欲的なNPOやボランティアと市が連携し、協働し運営にあたる」とされ、これを受け平成16年1月に上田図書館倶楽部を設立、平成18年12月NPO法人認可。

上田図書館倶楽部は市民参加による幅広い図書館サービスの実現を目的に、上田情報ライブラリーから図書館業務と関連業務の受託し、事業は自主的な企画運営をしながら以下のコンセプトで具体的な活動をしている。運営経費は会費、事業委託料、助成金など。

- ・市民が支える図書館づくり（広報活動・人材育成）…絵本読み聞かせ人材育成講座など
- ・市民の生活支援サービスと情報サービス…情報検索講座、市誌の目次データ化など
- ・千曲川地域文化の創造と発信…執筆編集講座、調べ学習支援など
- ・市民交流の場の提供…喫茶“BOOKCAFE つつじ”の運営、繭ホールでのコンサートなど

2 討議の概要

(1) 活動していく上で大事なこと

- ・自分たちの活動に関係している図書館職員は人事異動がある。事務の引継はするが市民団体の「図書館への思い」の引継をしっかりして行ってほしい。行政計画にのせていくことが必要。
- ・活動に対する行政側の支出（事務費、委託料、助成金）があることが大事。

3 まとめ

図書館に期待される事業を進めるには、図書館職員だけでは限界があり、知識が豊富な市民の参画が重要である。また、市民団体の活動に職員が付くなど活動に対しての人的助成も必要である。市民の皆さんと図書館職員が一緒になって、「市民のために、市民の図書館を創る」活動を、本日の事例発表を参考にしながら、それぞれの図書館で進めましょう。

第2分科会 課題解決支援サービス

助言者：宮下明彦（図書館協会事務局長）

司会者：等々力美代子（松本中央図書館）

発表者：大滝一郎（上田情報ライブラリー）

山下栄子（信州大学付属病院医療福祉支援センター）



1 発表の概要

<上田情報ライブラリー>

- ・ 通勤通学の生活の線上にある図書館をめざす。
- ・ 企画展示、「ことばのまゆ」ではコンサート、朗読会など行うが、それらは市民団体と一緒に企画する。市民団体と一緒に図書館作りをすすめる。
- ・ 郷土資料は千曲川関係の本を多くそろえ、行政、論文などの本など取り寄せるサービスもおこなう。
- ・ インターネット、データベースを中心にメディア情報センターの役割をはたしていく。
- ・ レファレンスの際は、図書館の資料、データベース、それでもわからない場合は他の図書館から参考になる資料を取り寄せる。
- ・ 事例が多い場合は企画展示でそれについての展示も行う。
- ・ 近年外国人利用者の増加にともない、母国語での日本語学習本を揃えていきたい。
- ・ 医療関係の資料が少ないため、揃えていきたい。
- ・ 少ない時間の中でも職員の研修を行っていきたい。

<信大医療福祉支援センター>

- ・ 松本市立図書館の分館ではなく、信大内の図書室。広さもあまりなく、蔵書数も少ない。
- ・ 患者の利用者は軽い本がいいため、文庫を増やしていく予定。
- ・ 医療関係の本は多く取り揃えている
- ・ そのほかにもどんな本を揃えていった方がいいかが課題。
- ・ 外来の診療案内と図書の分類法が少しちがうので本を選ぶときに少し迷ってしまう。
- ・ レファレンスは医療関係が多いが、個人情報なのでどこまで聞いたらいかがかわからない。
- ・ 子どもたちに読み聞かせはボランティアが行っている。

2 討議の概要

- ・ 医学、民間療法の本はどうしていくか→中を見してみる。医師に相談をし、科学的根拠に基づくものか。寄贈本はあまりいれない。
- ・ 信大図書室はどのくらい借りられるか→2週間10冊
- ・ やったレファレンスの蓄積は→上田：紙の記録はメモをとって、PC上で管理、情報共有している。
- ・ 国立のデータベースは、塩尻は参加しているがまだ、伊那は入っているが続けて使用してない。
- ・ レファレンスは専門の職員がやっているのか→上田：職員全体で相談している。飯山：司書4人でカウンターにでているが、職員全体で回答している。PCで管理。助言者：これからのレファレンスは情報をまとめ、レポートにしていくことが大事。こんなに図書館が役にたつということを表にだしていかないと予算は削られるのではないか。
- ・ 職員同士の情報共有は→朝の朝礼、共有ノートを作る。
- ・ サービスについて、うちの図書館はこんなことに取り組んでいるというものはあるか→町の新聞記事を抜き出す。PCに職員がとりこみ、図書館に来なくても見られるようにしている。助言者：データベースの方が情報多く、たくさん調べられるからよいのではないか。

3 まとめ（助言者の導を含む）

- ・ データベースは職員が使いこなすことが必要。企業との連携をとる。
- ・ 仕事にかかわる本をもっと入れるべき。
- ・ プロの司書でサービスを。
- ・ 展示などのサービスを変える。
- ・ 職員の意識改革、スキルアップが必要。
- ・ データベースはあるが、使ってサービス展開できる職員がいない。
- ・ 司書のみではだめ。市民団体と連携をとり、市民に参加してもらおう図書館作りをする。

第3分科会 利用者と共に歩む録音図書の在り方 ～よりよい録音図書をつくるには～

助言者：内藤 敦彦（上田点字図書館）

司会者：熊谷 祥子（飯田朗読奉仕の会「声の輪」）

発表者：中村千代子（飯田朗読奉仕の会「声の輪」）

原山 幸子（上田市立上田図書館つくしの会 DAISY 上田）



1. 発表の概要

・飯田市立中央図書館「声の輪」 中村 千代子

会員は新人養成講座（図書館事業・毎年10人程）で1年間研修を経て活動する。会員69名

活動内容 昭和56年（1981年）（国際障害者年）発足

月1回運営委員会 例会で会員の技術向上のための勉強、連絡。会報（会員の情報交換）

声の輪だより（利用者へのお知らせ・仕上がった図書案内）の発行

利用者との交流年2回、地域ボランティア団体への協力

今後の課題

・デジタル化へ移行するために起こる問題

図書館に録音設備がないので各自家庭で録音するため機器が高額、雑音の許容範囲、録音図書完成まで時間がかかりすぎる

・利用者の拡大、対面朗読の必要性など

・上田市立上田図書館つくしの会 DAISY 原山 幸子

デジタル録音移行へのみち

平成16年からデジタルに向けていたが「まだまだテープ」の時代だった。

先進施設見学（日本点字図書館、静岡県点字図書館、横須賀市点字図書館、神奈川ライトセンター）

平成17年秋デイジー信州開催

平成18年秋デジタル録音講習会

平成22年度から完全デジタル化に踏み切る

上田図書館の利用者の内訳は、視覚障害者と他の読書が困難な人々との割合が半々であるのでテープ録音図書に変換しやすいデジタル録音を工夫。他グループへの働きかけ、デジタル機器説明グループの立ち上げなど利用者がより情報を広く受け入れられるようにしている。

今後の課題

・デジタル再生機器利用の普及

・図書館を利用していない視覚障害者及び読書が困難な皆さんへの情報提供の工夫

・デイジー信州に参加していない図書館のデジタル化の促進

2. 討議の概要

助言者より デイジー、機器について一連の流れを具体的に説明

利用者の方より デイジーはテープより都合がよく量的にも扱いやすい。プレクストークの使用法がまだよく理解できていない等利用者と直接対話できたのは良かった。

3. まとめ

新しい機器に対処していくのが難しい。どのようにマニュアル化していけばいいのか →いままでのマニュアルを生かして作ると良い。CDからテープ化する方法、雑音の範囲、これからデイジー化するがパソコンは何がよいか等々質問が出され確認し合った。それぞれ進度が違うがこれからに向けてやる気があれば前に進むことが出来るので頑張ってやっつけていこう。

第4分科会 絵本の世界を楽しむ

助言者 下沢洋子 (「ガンバの会」主宰)
司会者 佐々木礼子 (鼎東保育園)
発表者 小笠原久美子 (丸山保育園)
小國貴栄子 (三穂保育園)



1 発表の概要

①地丸山保育園

地域の図書館の方(ボランティアの読み聞かせの様子、週1回家庭への絵本の貸し出しの様子やアンケート集約結果(誰が絵本を読むのか、週にどの位絵本を読むのか、読む時間はいつか、園から借りてきた絵本の利用について、絵本の貸し出しについて)

科学絵本「まめ」 平山和子著 福音館 科学絵本の世界を楽しむ実践で、実際に豆を発芽させ畑にまき、収穫するまでの成長の観察から、子どもの発見や気づき、運動会への表現活動につなげた実践例

②三穂保育園

地域の昔から伝わる龍の昔話から、子どもの好きな絵本と重なり、絵本から田んぼのかかし作りにつながっていった実践例

2 討議の概要

(1) 三穂保育園の発表についての質疑応答

(2) <絵本の世界を楽しむということは>

- ・一人一人絵本に対する思いは違う。その思いを大切に受けとめていきたい。
- ・絵本は子どもの物だけではない。中学生にもどんどん読んであげて欲しい。
- ・「この絵本を読めば〇〇になるのでは」という、絵本を手段につかっけてはいけない。子どもも大人楽しいと思う気持ちが大切。
- ・2園の絵本研修会の実践例を紹介する。
丸山保育園→月1回下沢先生のもとで、絵本の良さ、作者の思いや背景等を学ぶ。
三穂保育園→月1回下沢先生のもとで、「メディアづけで子どもの脳が危険」の本の読み合わせをしたり、絵本の読み聞かせの実践例。
- ・どんな絵本でもいいわけではない。昔から読み告がれているのはどうしてなのかと考えると、やはり感動できる内容だからだと思う。これからも読み告がれていきたい。

3 まとめ(助言の指導を含む)

- ・目の前にいる子ども達が絵本を楽しんでいる事が1番。そして、保育士が絵本を好きでないとダメ。「ちょっとまって」「あとで」はダメ、子どもの目を見て話して欲しい。
- ・絵本とは→どこでも楽しめて、大人も子どもも楽しめる物。
- ・子どもから見た絵本とは→先生や大人が読んでくれる物、読んでくれる事への喜びや楽しさではないか。知らない事の知る喜びや、確認する喜び。主人公と一緒に冒険できる喜び。自分の居場所がある。(主人公と一体になれる)
耳で言葉を聴いて、目で見えて確かめていく→子どもの能力
- ・目の前の子ども達に、沢山の絵本を 楽しんで欲しい。絵本の世界は広くて深い。

第5分科会 「司書教諭の仕事」

発表者 米山郁子 (長野市立通明小学校) 五味みゆき (松本市立芝沢小学校) 清水美紀 (飯田市立座光寺小学校)
藤原友二 (須坂市立墨坂中学校) 高橋かず枝 (長野市立篠ノ井東中学校)

1 概要

(1) 説明「学習指導要領と教科書の新旧比較から見えること」(小学校)

- ・学習指導要領「C読むこと」における読書活動は、全学年に本や文章を選ぶことについての指導が明記され、高学年では「比べて読む」という新しい視点が示されている。
- ・光村図書の新しい国語教科書では、本の検索、本で調べてまとめる学習、図書館の仕組みを考える学習等があり、「図書館地図づくり」「報告書づくり」「図書館改造計画」等の学習活動が提案されている。そのため、児童がイメージしやすい分類表示、図書館の白地図、ポプラディアをはじめ調べる学習に使える本を揃える等の準備をしておく必要がある。

(2) ワークショップ「司書教諭の目で本を揃えよう」(小学校)

- ・1年「どうぶつの赤ちゃん」の学習では、「どうぶつずかんづくり」に発展させていく。本や図鑑から子どもが必要な情報を自分で得ることがねらいだが、調べる本が少ない上、題名と表紙のみで選書する1年生の実態から適切な本を選ぶことが難しい。そのため、指導者があらかじめふさわしい本を準備しておいてそこから選ばせるようにする必要がある。
- ・参会者全員で動物の本や図鑑にあたり、レベル分けと、動物の赤ちゃんの情報のみきわめを行い、リスト作りを行った。

(3) ワークショップ「中学年の調べ学習・本の探し方」(小学校)

- ・3年「すがたを変える大豆」の学習では、食べ物について本を使って調べ、わかったことをまとめて書く「食べ物博士になろう」の学習に発展させていくため、児童が必要な本を選ぶ手がかりをたくさん持てるようにしたい。十進分類法の各分類の本には、様々な角度から大豆に関する記載がある。その情報を見つける過程で働かせている「手がかり」を検索のツールとして活用できるように指導したい。
- ・各分類の本から大豆が記載されている本を探し、何が「手がかり」だったか発表しあった。

(4) 実践発表「朝読書を活動の中心とした図書館運営」(中学校)

- ・学校教育目標を受け、「図書館の自主的な利用の向上、生徒の読書量の向上」を目指している。目標達成のため実施している中では、「朝読書の徹底」と「読み聞かせ」に特色がある。
- ・朝読書は4月に25分かけて全校オリエンテーションを実施。朝の10分間読書は年間を通して行い、学担、副担も一緒に読書をしている。春と秋の読書旬間中は30分間実施。
- ・職員有志が「素敵なお話を読み聞かせ隊」を結成。絵本をスクリーンに映しながら読み聞かせている。中学生にも絵本の読み聞かせは大変有効である。

(5) 実践発表「パスファインダー作りの指導の実際」(中学校)

- ・パスファインダーとは、ある特定のテーマに関連する資料や情報の探し方を1枚のリーフレットに簡単にまとめたもの。パスファインダーを手がかりに多くの情報を入手し、レポート作成等に役立てることができる。
- ・学習活動の流れ【テーマを決める→百科事典からテーマに基づくキーワードを探す→手順を示したワークシートに沿って作成→作ったものを実際に使う】
- ・中学生が夢中になって取り組み、本に興味を持たせることができる効果的な方法である。



第6分科会 「司書教諭と学校司書 ～個の学びを支援する司書教諭と学校司書～」

司会者 尾沼暢彦 (佐久東中学校)

発表者 小松吟江 (上田市城下小学校)・藤田波留美/木原恵子 (飯山市秋津小学校)

栗林章善 (池田町高瀬中学校)・樋口しさへ (岸野小学校)・尾沼暢彦 (佐久東中学校)

1 発表の概要

(1)「調べ学習 はじめの一步」 城下小 司書教諭 小松吟江

- ・ワークショップ「ラベルをさがせ！」
- ・4学年2クラスを、司書教諭と学校司書で指導。本を読むだけでなく、調べ学習のできる図書館作りや、インターネットだけでなく、図書館でじっくり調べられる子を目指して。
 - 1学期「ラベルで探そう」…ラベルに従って並べられている本の配架について知る。
 - 2学期「百科事典を使ってみよう」…他所から借りて「ポプラディア」を何組かそろえ、実際にことがらを調べる。



(2)「特別支援学級の子どもができる本と親しむ活動」 秋津小学校 司書教諭 藤田波留美/学校司書 木原恵子

- ・都道府県に興味を持った5年生男子Tさんへの指導の様子を、寸劇を交えて発表。
- ・その子にとって興味のある本を数冊、いつでも読めるようにさりげなく近くに置く。
- ・「本」だけではなく、パズルやかるた等も本の仲間として加えておく。
- ・足しげく図書館に通い、学校司書の先生と仲良しになったり、一人でも楽しめるような好きな本と出会ったりする体験を積ませる。
- ・心の育ちや、よりよい人間関係作りなども期待できるように支援をしていきたい。

(3)「歴史人物新聞の作成を通して図書館との連携を考える」 高瀬中 司書教諭 栗林章善

- ・中1社会の教科学習。新聞作りの基本(1時間)、学校司書から調べ学習の仕方についてのオリエンテーションを受けて資料探しと調査活動(2時間)、まとめと完成は連休を活用。
- ・インターネットだと内容が似かよりがちなので、あえて図書館と手持ち資料に限定。
- ・調べ方の説明では生徒のモチベーションは上がらず、実際の授業の課題で取り組ませたい。

(4)『知る』を支える学校図書館 岸野小 学校司書 樋口しさへ

- ・整備された図書館…正しく分類し、番号順に配架することが大切。
- ・分類を単純にすると、作業は楽だが内容に合わせて変更できない。シリーズ別や年齢別では調べるには使いづらい。小学校でも3桁にして、将来公共図書館を使えるように指導すべき。
- ・司書教諭と学校司書が連携して、計画的に図書館を利用できるように…年間計画の作成など。

(5)「全国図書館大会に参加して・・・ゼロからの出発 可能性はどこにでも」 佐久東中 司書教諭 尾沼暢彦

- ・「朝読書」の時間確保、公務分掌の兼務、学校司書と司書教諭の連携、パソコンとの共存等について。同じような悩みが全国大会でも話題になっており、身近な所から改善は可能である。

2 討議の概要

○意見交換

- ・A中学校では2時休みが15分から10分に短縮されることになり、生徒が本を借りる時間が無くなるどころ、司書教諭が意見を出し15分を確保した。小中併設のB校では、中学生のみ10分休みになったが、全ての生活が忙しくなり、15分に戻した。
- ・勤務時間の短縮で、朝読書が5分にされそうだったが、学活を5分短縮して10分確保した。しかし学活の時間は足りなくなっている。
- ・朝読書が他の活動にまわされて前日に無くなってしまうことがあり、“自由に使える時間”とされていないか。また、読み聞かせボランティアが入ると、児童は自分では本を読んでいない状態になる。
- ・全校35人のC中学校では小規模校のよさを生かし、月曜日の職員朝会以外は、全校が図書館で読んでいる。

3 まとめ

司書教諭がいなければ、学校司書は校内に相談相手もなく、孤軍奮闘になってしまう。仲間意識を持って取り組んでいきたい。

第7分科会 「学校司書の仕事 ～新鮮で使いやすい図書館を目指す日々の実践から～」

発表者 上島陽子（辰野中学校） 吉澤和代（三郷中学校） 伊藤由紀子（篠ノ井西中学校）
伊東由美子（清明小学校） 宮坂美穂（城南小学校） 由井尚美（篠ノ井西小学校）
荻原秀子（三水第一小学校）

挨拶 長野県図書館協会小中学校図書館部会 副部会長 戸谷信一（七二会小学校校長）

1 発表の概要

学校図書館の利用者（児童生徒、先生）のニーズに応えるために学校司書は、環境を整備し、読みたい知りたいに応えるために資料を収集、更なる発展のために広報活動や、ブックトーク、読み聞かせなどの仕事をこなしている。

特に、選書から利用者到手渡すまでの技術は何年司書をやっても難しく、これといった参考書もなく、司書の悩みの種でもある。

そこで学校図書館司書委員会では、選書方法と手渡し方法について提案をした。

(1) 実態調査から 小学校の場合

小学校の3年生から6年生まで日ごろどのような本を読んでいるのかアンケートをとった。

結果は

- ・映画化やドラマ化などメディアの影響に加え、背伸びをしたいと言う気持ちからかなりオトナ向けの本を読んでいたりと、YA（ヤングアダルト）と称する類の本を好んで読んでいたりしていることがわかった。
- ・学校図書館からかりてきた本を読む傾向は低年齢に多く、高学年になると学校図書館以外から本を入手し読む傾向が多いことがわかった。

(2) 学校図書館に導く方法 実践例

アンケート結果から、「図書館の本に導く方法はないのだろうか。どのような方法が功を奏したのか」読書傾向ごとに図書館にある本とどうつなげるのか例を挙げ、実物（本）を見ながら発表。

(3) 実態調査から 中学校の場合

中学生はまったく本を読まないわけではない。中学生の読書が学力と結びつくのだろうかという疑問がわいた。

- ・自分の考えや思いを文章や口頭で伝えることができるか。
- ・表やグラフから読み取ることができるか。
- ・説明文を理解することができるか。

(4) 学校図書館と学習（授業）を結びつける

授業や行事の中にブックトークを取り入れて、使ってもらえる図書館づくりを通して学校司書の役割りについて提案。

(5) 選書のための参考資料について

- ・これは使えるというお勧めの選書ツールを実物展示。
- ・文庫化、装丁を変えただけで本を手にとってもらえたという例。
- ・ライトノベルの世界を知る手立てや工夫で文芸書に幅をもたせる例。

2 討議の概要

小学校6グループ 中学校2グループに分かれて選書方法や本の手渡し方などを話し合った。

- ・事前に参加者より「お勧めの本」を紹介していただきリストを作成し、配布した。「安心して購入できる本の資料になる。」と好評。
- ・実物（本や選書資料）がたくさん展示されていて参考になった。



第8分科会 「読書指導の実践」

司会者：大石 順子（飯田市立遠山中学校）

発表者：中島 寛子（佐久市立中佐都小学校） 林 明美（千曲市立戸倉小学校）

越川 浩之（塩尻市立塩尻西部中学校）

1 発表の概要

(1) 「手にとって欲しいと願う本との出会い

—ブックトーク・ブックウォーク宣言に工夫を加えて—（林 明美先生）

- ・ブックウォークの実際、おすすめの本100冊の取り組み（読書記録）の紹介
- ・選書能力をいかにして高めるか

(2) 「進んで本に親しむ子どもを育てるために

—ブックトークで子どもと本を結ぶ—（中島 寛子先生）

- ・司書教諭としてのブックトークの実践の紹介

(3) 「調べ学習を活性化させるための図書館教育のあり方

—地域主幹図書館との交流を通して—

—情報活用能力の向上を目指して—（越川 浩之先生）

- ・情報センターとしての図書館作りや学校図書館教育年間指導計画の作成
- ・地域図書館との連携や「総合的な学習の時間」における「調べ学習の実際

2 情報交換

- ・学校 100 誌や公民館誌・市町村誌等、地域の資料を計画的に集め利用できるようにしていく。信州社研の先生が資料を持っている。
- ・新しい教育課程にともなう選書が難しい。
- ・手にとってももらえない本を教科書の文章とタイアップさせたり同じ著者の物を紹介したりしていくとよい。
- ・どうしても本が読めない子に対して、その子がどのくらいの本なら読めるか出発点を見つけてあげる。
- ・教諭と司書と図書館事務員との連携を図りチームとして子どもたちのためになることをする。
- ・読ませたい本をなかなか読んでくれない場合、生徒がブックトークをする、担任がすすめる、100冊おすすり本リスト、国語の教科書の作品原作の紹介などがよい。
- ・地域のボランティアの方の読み聞かせや公共図書館の団体貸し出しがありがたい。
- ・読み聞かせを担当として毎日していると子どもの読書の成長を感じる。
- ・ブックトークのやり方や知らない本を紹介していただきとても勉強になった。
- ・百科事典の使い方など調べ学習の基礎を司書の先生が教えてくれてとてもありがたい。
- ・担任と司書の先生との連携が大切である。

3 まとめ

読書については、子どもたちの中にも個人差があり、進んで読もうとしない子への対応や司書の先生や担任や司書教諭との連携など読書指導について同じような悩みを持っていることがわかった。発表者の先生方の実践や分散会での情報交換を通して、参考になることが多く得られたのではないのでしょうか。ぜひ日々の実践に生かしていきたいと思いました。



第9分科会「公共図書館の経営と課題 ～課題解決型図書館をめざして～」

助言者 賜正俊（南信教育事務所指導主事）

司会者 菅沼千夏（鼎中学校）

発表者 佐々木真実（松川中学校）・一ノ瀬文枝（湖東小学校）・臼井智昭（高社中学校） ＊発表順

「ぼくの わたしの 世界にたったひとつの絵本」

1 発表の概要

村立図書館や安曇野ちひろ美術館との交流から、ちひろの作品や歴史に触れたことをきっかけに「世界でたったひとつの絵本づくり」の活動に繋げ、1人1人にじみ絵作品を作り、作品にお話しをつけ、絵本を完成させた。

2 討議の概要

(1) 学校図書館利用の様子について

・担任が呼びかけをしなくても自分から図書館へ足を運ぶ児童が増えた。お礼状を書いたことも影響しているのではないと思われる。

(2) 実践を聞いての感想

- ・絵本への新しい観点を持つ良い活動だと思う。
- ・美術館との交流を通して、ちひろの作品や歴史に触れる事ができると同時に、地元に関心をもつきっかけにも繋がる。
- ・読み聞かせの良さを改めて感じさせてくれる実践だと思う。

「地域に根ざし、図書館資料の多様な利用を探る～総合的な学習の時間の取り組み 6年『戦争をかたる』～」

3 発表の概要

総合的な学習の時間での戦争当時のお話をもとに、社会科での戦争調べや国語科での戦争の詩の群読、発表会を通して、自分たちのメッセージを伝える。

4 討議の概要

(1) 戦争教材の扱いについての感想

- ・4年生で、『ひとつの花』を指導したとき、児童に物語の中身を理解させるのに時間がかかった。他方からの資料や教材を活用しながら進めた。図書館にある戦争資料を活用し、学級にも戦争教材や資料のコーナーを設けたい。
- ・同じ戦争とうテーマを多くの教科で取り扱い、複合的に進めたところが良い。国語科や社会科で学び、総合で発信するという流れが大切だと思った。

(2) 各自でテーマを絞るときに助言方法はどのように行ったのか。

- ・資料や写真を見せながら、戦いの場面や生活の場面のようなそれぞれの場面で「どんな武器で戦ったのかな。」「服はどんなものを着ていたのかな。」と発問し、疑問を抱かせ、調べたいテーマを決めさせていく。

「図書館を利用して、情報を収集、選択、活用する力を高めるための指導のあり方」

5 発表の概要

児童が先生にインタビューし、興味関心や本の好み等を情報収集する。その情報もとに班で話し合い、「先生におすすめの本」を選び、紹介する。

6 討議の概要

(1) 実践を聞いての感想

- ・相手の望んでいる本を、相手意識を持って探し、紹介するという新しい実践だと思う。また生徒自身の読書の視野が広がったのではないだろうか。
- ・読書量に関わらず、どんな本でも紹介できるところが良い。

(2) 中学校までにやっておかなければならない図書館指導とは何か。

・中学では「図書」の時間が確保できないため、小学校ではたくさんの本に親しみ、本を好きにしておいてほしい。

(3) 実際に生徒が紹介した本は、どのようなものだったのか。

・小さなお子さんをもつ先生には読み聞かせ用の絵本や、アニメが好きな先生にはそのアニメの文庫本等、集めた情報をもとに選択していた。

(4) インタビューを行った先生はどのように選んだのか。

・いろいろな教科の先生にインタビューできるようにインタビューする先生は指定した。

(5) 本の紹介はどのように行ったのか。

・選んだ本をもっていき、あらかじめ用意した紹介用ワークシートをもとに発表した。

7 まとめ（助言者の指導を含む）

【使える図書館にするために】

(1) 図書を廃棄する。利用価値の薄くなったものは思いきって廃棄し、新しい図書や資料を選書していく。

(2) 資料を選書する。常により良いものを置く努力を行う。

(3) 分類、配架する。使いやすく、利用しやすいシステム配架を行う。

【授業と図書館の繋ぎ方について】

「こんな資料があったらいいな。」という願いと、実際に図書館へ足を運び、資料を見つけたときの「この本使えそうだな。」という感動、この2つが繋がったとき、授業と図書館が繋がる。

【扱う場を考える】

(1) 導入：児童の興味や関心をひくことができるもの。

(2) 展開：教科書を補うもの。

(3) 終末：単元の関わるものとして紹介できるもの。

【教科指導のねらいと照らし合わせる】

指導の中で、図書や資料が主（主役）か補（補助）か参（参考）にあるものか、指導内容と照らし合わせて活用することが大切だ。図書を知ることで人生の豊かさが違う。図書をきっかけに繋がる楽しさを感じてほしい。



第10分科会 「学校図書館の運営」

助言者 三澤ゆり（総合教育センター専門主事）
司会者 牧野優子（飯田西中学校）
発表者 藤井淑子・寺澤真由美（伊那東小学校）
川本修一（東中学校）・宮原美恵（長小学校）



1 発表の概要

(1) 「スーホの白い馬」の世界を広めるために参観日に親子で楽しむブックトーク

スライドによる実践発表。音楽会で歌うため、本を読み聞かせたり図書館にあった馬頭琴の音色を聞かせたり劇をすることで物語の世界をイメージさせた。図書館利用が豊かな世界を広げる。

(2) 多くの生徒に親しまれる図書館をめざして

本の貸し出し数と荒れは比例する。本の選定を公募にすることで、図書館との繋がりがもて図書館に足を運んでくれている。図書館での百人一首の取り組み。短い休み時間などに、3～4人などの少人数で、騒ぐことなく楽しく行っている。読み聞かせの取り組み。地域に「素語り」をしているグループが居り、学校に来てもらっている。（ビデオ放映）

(3) 学校図書館を活用した学習とNIE

昨年、NIEの指定校となる。新聞記事を教材化した実践報告。全国大会の報告。新聞記事による報告。信濃毎日新聞社から出ている学習プリントの活用の紹介。新聞記事を元に図書館にある本を活用した実践報告。荒れている学校は本を借りる子が少ない。落ち着いて本を読めていない。教科書が変わる来年度のためには、内容に沿った関連本を今年中に選定しておくといよい。中国の小学校の視察報告。図書館については充実しているとはいえない。

2 討議の概要

(1) それぞれのレポートについて質疑応答

(2) 担任と学校司書の連携、ブックトークの実践、教科学習と図書館の関わりについて

- ・担任が司書の先生に、行事や各教科の内容に関連した本を紹介してもらい、読み聞かせやブックトークを実践。ブックトークは2人が資料を持ち寄り、発表の仕方を工夫している。司書の先生に関連本を用意してもらい、担任がブックトーク。

(3) 中学における足を運びたくなる図書館運営の工夫について

- ・本の選定が公募になっていないところが多い。やると漫画、携帯小説が出てくる。それに丁寧に対応していく。図書館が自分の味方だと意識してくれる。子供では買えない高価な本を用意するといよい。学ぶ者が主体で選定していくことが本来の姿。

(4) 学校図書館とNIE（新聞を教育に）

- ・著作権については、CRICの冊子に載っている。今のご時世、著作権について学ぶことは大切。だいたいの新聞記事は、授業に使う場合は特に問題はない。新聞の記事は、図書館に掲示することも有効的。国語や社会科で使えるものが多い。

3 まとめ（助言者の指導含む）

魅力ある図書館とは、人・場・資料が揃っていること。今日の3つの実践はこれがある。なぜ図書館なのか、それは子供たちにとって本や読書が子供たちの未来を拓くものであるからだ。感じ、考え再創造して能力を伸ばす。東小学校の実践は、馬頭琴の音と言葉と一緒に残る『言葉を食べる』ことができています。ブックトークは1冊からでもできる。個々のがんばりを学校全体に広げて欲しい。各教科の導入に使える本がたくさんある。東中学校は、百人一首で学校文化を創っていくとする取り組みがよい。語りの人にはリズムがあっている。長小学校のNIEの取り組みは、読解力、読書力がついていく取り組みであると思う。

第11分科会 「魅力ある学校図書館作り」

司会者 内山昌吾（松本美須ヶ丘高等学校）

発表者 田中和彦（屋代高等学校）「生徒の読書歴に関する考察 その2」

北原幸，知久富枝ほか（下伊那地区高校図書館研究会）「図書館の魅力を伝えるには」

「生徒の読書歴に関する考察 その2：1988年の生徒と2010年の生徒を比較して」

1 発表の概要

1988年第38回図書館大会において報告した「生徒の読書歴に関する考察」（長水地区）の際と同じ調査を今年は今更地区で行った。加えて屋代高校においては、読書をしなくなった場合の原因と、小さい頃の読み聞かせの経験の有無についても尋ね、この間の変化と活字離れの原因について考察した。



調査から読み取れたことは

- (1) 中高生の読書活動には学校での朝読書が大きく影響している
- (2) 読書をしなくなる最も大きい理由は部活動が忙しく時間が取れないことである
- (3) 小学校時代から読み続けている生徒は6%ぐらいで10年前との変化は見られなかった
- (4) 一度読書の習慣をなくしてしまうと再び読み始めるのはむずかしい
- (5) 幼少時の読み聞かせの影響は小中学校では大きいが高校では差がなくなる

2 討議の概要

高校からの参加者が多かったが中学校からも参加があり、朝読書、選書を含めた図書館のありかた等について質疑応答とあわせて活発な意見交換がなされた。

- (1) 学校での朝読書について、頻度、時間帯、時間、生徒の反応、職員の意識、計画の主体、本の種類等さまざまなことがらについて意見交換。中学校ではほぼ100%朝読書を取り入れているので、生徒は高校でも抵抗なく受け入れられるのではないかと。
- (2) 学校図書館のあり方について。易しいものから難しいものまで幅広く扱うことで魅力が向上し、多様な生徒に対応することができるのではないかと。利用を呼びかけるとともに、易きに流れがちな生徒が良書を手取るよう動機付けを行うことが大切ではないかと。

「図書館の魅力を伝えるには」

1 発表の概要

下伊那高等学校図書館協議会司書会として研究していることの実践報告。下伊那では年間8回の司書会を会場司会持ち回りで行い、支部内の学校図書館が同じレベルを保てるよう努力しているも。発表のための特別な研究でなく、司書会で研究していることを日々の実践の中で生かしている事例をパワーポイントと展示で報告した。

- (1) 広報紙 司書が発行することが多い
- (2) 展示の工夫 新着図書、同世代作家コーナー、POPカード、月毎特集、出前図書館
- (3) イベント（読書週間） 生徒会役員のお薦め図書他

2 討議の概要（質疑応答）

- ・高校図書館の予算は（中学は私費で人数による）→130万ぐらいだが授業利用には足りない。
- ・高校で活発な活動をしていることを知らなかった。中学と交流できないか→地域開放しているが中学の先生が見に来た事例はない。いつでも近くの高校へ見に行ってもらいたい。
- ・テーマ展示の本の交換サイクルは？また、貸出できるか？→貸出可。サイクルは各校さまざま。
- ・展示は誰が行うのか→主に司書だが、読書週間等の時には生徒も行う
- ・図書館から離れた場所に掲示板を持っている学校はあるか→2校（昇降口、渡り廊下）

第 12 分科会 「大学図書館と公共図書館との地域連携」

司会者：佐藤有紀（佐久大学・信州短期大学図書館）

発表者：郷原正好（信州大学附属図書館）

1 発表概要

7月15日、信州大学附属図書館は松本・塩尻・安曇野3市の公共図書館との間で連携協力のための協定を締結した。この協定は国立大学の公共性の観点から地域と密接な関係を築くため、手始めとして本図書館の123万冊の資料(専門書が中心)と松本地域の3市公共図書館(松本市108万冊、塩尻市40万冊、安曇野市30万冊)の資料(一般書)の共有化を図ることで利用者の利便性を高めることを目的としている。地域に根ざした大学図書館として公共図書館との連携の意義・利点・課題について考える。

(1)連携内容

・相互貸借

図書の貸借は、7月～10月の3市への貸出し45件(安曇野市が主)、3市からの借出しが3件となっている。

・OPACの相互リンク

蔵書検索については相互にリンクを設けている段階で、統合検索機能の実現は経費面などからこれからの課題である。

・貸出し資料の返却サービス

直接借り出した図書は近くの連携図書館へ返却することが出来る点が便利でユニークである。

7月～10月で3市から返却されてくる図書は24件、3市へ返却される図書は144件(松本市が主)となっている。

(郵送料は返却された図書館が負担するが、松本市への返却は松本市から病院図書室「こまくさ」まで配送車が運行されているのを利用できる)

・共催イベント、職員研修

本学教員の出張講演を活用するなど共催イベントを開催する。各信大キャンパスの通信網を利用するなどして、信大内において図書館職員の勉強会を開催することを始めている。

(2)意義・利点・問題点

大学図書館の視点からみると、専門書の学外への提供、一般書の学生への提供、公共図書館を資料返却ポイントとして手軽に利用できる利点があるが、市民利用者の増加により学生の利用が難しくなる点、データベース・電子ジャーナルの利用について市民への対応を考える必要があるなどの点でマイナス面があると考えられる。一方、公共図書館の視点からは専門書が大学図書館で利用できる、大学図書館から借りた図書を地元の返却ポイントで返却できるなど利点がある。

(3)まとめと課題

業務負担を軽減するために相互の利用の共通ルール化を行い、図書の返却は発生払い(返却された図書館払い)とする、破損資料の場合は直接返す、資料の申込処理はFAX利用で周知・徹底することとしているが、トラブルは発生していない。

今後の課題としては輸送コストの問題、信州大学の各キャンパスを拠点としての展開、県広域へサービス拡大をすることがあげられる。

(4)その他の地域連携について

- ・文化的連携として、地域資料・各種コレクションの電子化公開、大学の絵画等の公開、遺跡リポジトリへの県内資料の登録公開を進めている。
- ・学術的連携として、平成22年度に信州共同リポジトリを立ち上げ地域学術情報発信を進めている。
- ・専門領域での連携として、科学技術・医学分野DB(JDreamII)の地域病院コンソシアム契約整備とコンソシアム参加病院への文献複写サービス提供、附属病院内の患者図書室設置などを進めている。



2 討議の概要

輸送コストについて返却の輸送業務を他部署の外出業務の際と一緒に依頼する意見、公共図書館は大学図書館を積極的に利用する意識が低いのでPRが必要である、大学図書館側も地域の図書館としての意識を持つことが必要であるのではないか、物流の問題もあるが地域図書館の横断検索機能がなんとかできないものか、DBの外部地域利用者への提供はどの程度可能なのか、また各館の現在の公開対応状況について報告がされた。また信州大学からは他館で公共図書館との連携を考える場合には申し出てもらえれば相談も可能であるとの説明があった。

3 まとめ

公共図書館からは、大学図書館は敷居が高い感があるなど地域の図書館でも情報がわからない状況があるので、今回の会議の成果のひとつとして部会参加館の情報一覧を作成し共有することが提案され、幹事館(佐久大学)が必要な情報項目案を各館へ配布し調整することとなった。また参加館のメーリングリストを立ち上げ、情報共有することが承認された。

第13分科会 子供の成長に合わせた本を選んでみよう～読書ボランティアとして～

助言者 小林いせ子（みすゞかる母文の会）
司会者 高橋あや子（みすゞかる母文の会）
発言者 横山佳栄（上小・東御親子読書の会）



1 発表の概要

上小・東御親子読書の会の横山さんは、現在上田市立塩川小学校で月に2回、年間20回程の読み聞かせを行っています。

5名の会員で各人が無理なくできる範囲で楽しみながら、活動をされています。また、年に一度、全校児童と先生方に見て頂く読み聞かせが恒例行事となり「まゆとおに」「ともだちや」「こいぬのうんち」「あらしのよるに」「かちかちやま」「びんぼうがみとふくのかみ」などを選び発表しています。大人がもっと良い本と出会い楽しむことが、子供が本と出会い楽しみ人生をより良いものにしていくと考えています。今後の課題としてより多くの人に読み聞かせに参加してもらうために機会を作っていく事を考えています。

2 討議の概要

6グループに分かれ参加者が持ち寄った本の紹介と、読み聞かせをする中での悩み・課題について意見を出し合いました。中学生に読み聞かせをする時に「読むのに時間がかかる」「読み聞かせをしても反応がないように感じる」などの課題がある。

- ・反応は薄いけど意外に楽しんでいるらしい、受け入れる姿勢で待っていて読んでもらうのが好き
- ・昔話は定番であり、人生の教訓が含まれていて良い。また繰り返し読むことでよさがわかる

忙しいお母さんが多く読み聞かせに参加できる人が少ないので読み聞かせの勉強会や講習会などをする必要があると思われます。

「絵本はたんたんと読むのが良い？」という質問がありました。

3 まとめ（助言者の指導を含む）

- ・2～4歳 子守り期 4～6歳 昔話期 6～8歳 ぐう話期
8～10歳 童話期 10～12歳 物語期 12～文学期 を考え選ぶと良い。
- ・中学生にはテーマを決めて読む本を選ぶと良い
- ・「絵本はたんたんと読むのが良い？」

→トーンを落として読むという事ではなく「心を込めて読む事」と考えると良い。参加者からお薦めの本が紹介され、様々な意見が出されました。これからの読み聞かせに取り入れていきたいと思います。

第14分科会 地域の心を育てる読みきかせボランティア

助言者：牛山貞世（茅野おはなしくれよん代表）

司会者：田中澄子（飯田モン・クール）

発表者：加藤静夫（飯田おはなしくらぶ おおきな木） 高木千奈美（岡谷おはなしの会）

1 発表の概要

加藤静夫（飯田おはなしくらぶ おおきな木）

14年度飯田市図書館の読み聞かせボランティア養成講座に応募し半年研修を受けた仲間と、足掛け9年活動してきた。女性13人、男性3人で、男性がいるのが特徴。女性より男性が読み演じた方がぴったりした題材がある。年齢、職業経験も幅広いメンバーで、飯田下伊那一円の託児所、育児サークル、児童擁護施設、保育園・幼稚園・小学校、各地公民館、図書館、高齢者サークル、各種イベント会場で、0歳から80歳を対象に実施している。中心は保育園児というつもりでいる。

「絵本を通じて子どもと一緒に楽しい世界を味わう」「絵本と子どもの橋渡しをする中で、情緒や想像力豊かな子どもを育てる」が活動方針、無理をしない、自分たちも楽しむ、他人の子どもとかかわる責任の重さを自覚する。子どもたちは読み手の私たちの心まで見て聞いて感じている。

▽定期的な活動

・読みきかせ

平成20年度…236回 4424人 / 平成21年度…222回 3990人

3保育園と1児童養護施設で毎月実施。年当初に担当クラスを決定し、1年間変更しない事で子どもの成長を知り、効果的な活動を行える。

選書（個人）～練習（個人）～リハーサル（施設ごと）～実演～実施記録記入～反省会（その場で）～記録簿の回覧（年度ごと）

・定例会：毎月第2水曜・上郷図書館、全員参加、前月・当月の反省、実施記録簿の読後感想など行う。

・勉強会

定例会：手遊びの練習（復習）、発声・発音の練習、テキスト輪読、実演1～3人

定例会以外：実演1週間前のリハーサル

（プログラムとしてどうか、スピード、アクセント、声量、読み込み不足ではないか、気持ちののって自分が楽しんでいるか、伝えたい事が伝わっているか、本の持ち方、ページのくり方、見開きが水平になっているか）

・各種講座への積極的参加呼びかけ

▽不定期な活動

・読み聞かせ

平成20年度…33回 1283人 / 平成21年度…25回 864人

方法、手順は定期的なものと同じ、飛び込みもあり全部は受けられない。

選書の難しさ、本を知れば知るほど難しく感じる。また紙芝居には絵本と違った子どもたちの強い反応をみる事がある。紙芝居は日本が発祥の地であり、正面から取り組むべきではないか。メンバーの入れ替わり3分の1ほどあった、新人の加入を積極的に推し進めるのも大きな課題だ。

高木千奈美（岡谷おはなしの会）

読み聞かせに加え、語り、人形劇など様々な形を通してお話を伝える活動を行っている。

▽岡谷おはなしの会

10年ほど前に入会、語り、読み聞かせ、人形劇、パネルシアターなどを行っている。

▽おはなしだいすきポポーの木

2004年に読書活動ボランティア団体と個人が集まって発足。独立行政法人国立青少年教育振興機構の助成による活動が中心。学童クラブでの読み聞かせなど助成受けない活動もある。

▽個人として

個人としては、地域での活動、高齢者施設、岡谷市子育て支援館での読み聞かせ。

▽保育園・学校で

「岡谷おはなしの会」だけで開く事もあれば、他の団体・PTAと協力して行う事もある。学校・保育園などの要望に合わせ、学年・発達段階・時間配分を考慮に入れて、語り・読み聞かせ・人形劇などの演目を決めている。今の子どもたちも、集中して聞く場が与えられれば、自分の耳をフルに使って聞く事ができる。

養護学校では、人形劇には親しんでいても、語りにはなかなか接する機会のない子どもたちに、ぜひじっくり語りを聞かせ



てあげたいという依頼だった。語りの他に絵本の読みきかせや、ミニ人形劇、パネルシアターで構成。先生方が一緒におはなし会を楽しんでくれたのも子供たちに伝わりやすい環境になった。

春休み・夏休みに小学校の学童クラブでの読みきかせを、「ポポーの木」では岡谷市の生涯学習課から依頼を受けて行っている。絵本はだいたい2冊、1冊目は落ち着いてじっくり聞けるお話、2冊目は愉快なお話を選んでいる。

岡谷では、ほとんどの小中学校でボランティアの読み聞かせが入っている。朝の会が終わって、1時間目が始まる15分間。本を選ぶ時には、内容もだが、長さも大切。与えられた時間内で収まるように気をつけている。高齢者グループホームでは月1回の読み聞かせは、昼間なので少ない人数で当番を回しているのが現状。2冊ずつ絵本を持っていく。高齢者だからと言っても、外国の話、ちょっと科学的な内容でも、こちらで決めてしまわず広く選んだ方がいい。手遊びの他に唱歌を歌ったりする。読みきかせ後は3時のお茶の時間になり、一緒にいただく。一緒に時間を過ごすのが大事な事だと思っている。

赤ちゃんへの読みきかせは、岡谷市子育て支援館「こどものくに」で。対象は0歳から3歳までの就園前の子、基本的に1人で行く。小さい子ども相手なので集中できる時間は短く、いかに絵本や手遊びを楽しんでもらえるか、ボランティアの実力が試されているといえる。

市内病院の小さなホールで年1回くらいのおはなし会を開いている。病院附属施設の高齢者が主にお客さん、車椅子の方もいて、80名くらい。おばあちゃんの方が反応がいい。

県宝武家住宅「旧渡辺家」で囲炉裏を囲んでのおはなし会では、地域の学習活動の一環として、毎年秋に開いている。活動の拠点はやはり図書館。市立岡谷図書館の毎週土曜日「おはなしの森」では、「岡谷おはなしの会」が毎月第3土曜日を担当し、2人一組で1人が語り、もう一人が絵本の読み聞かせをしている。ここ数年聞きに来る子供が低年齢化している。未就学の子供ばかり。私たちボランティアが子どもの元へ出かける機会は増えたが、おはなし会に自分から足を運んでくれる子供が減っている。

「図書館子ども読書まつり」へは、「岡谷おはなしの会」として人形劇で参加。

「岡谷おはなしの会」では年に1回、「語りによるお話の会」を行っている。年々子どもたちの参加人数が減少し、低年齢化が進んでいる。長いお話やちょっと難しい話を語る機会が減っている。

今の時代だからこそ、直接に相對して生の声でお話を伝える事が人と人をつなぎ、コミュニケーションをしていく手助けになると思う。私たちボランティアが機会あるごとに出かけていき、子どもたちと楽しいお話の時間を共有する、活動の必要性がこれから高まっていくのかもしれない。

「ポポーの木」では男性対象にした講座を開いていく。輪が広がっていく事を願いながら、地道に活動を続けて行きたい。

2 討議の概要

(1) 発表者等への質問

①大型絵本やパネルシアターは、どういう場所でのように使っているか？

「プログラムを組んでおはなし会をする時、小学校や病院施設で対象人数が多い時に使う」(高木)

②ボランティアを掘り起こすアプローチについて、どうしているか？

「図書館事業のいろいろ催しなどでの公募の他に、自分の知り合いを通じてだが、なかなか」(加藤)

③高齢者向けの選書の仕方は？

「高齢者は本当に幅が広く、文学的に造詣の深い方もいるし、軽いもの好む人もいる、相手をひとまとめというのは難しい。まず相手を知る。最初は昔話を持っていき、どこで生まれたかとか話ながら知識を入れる。子どものようにいきなり新しいものというのは難しい」(牛山)

(2) 学校での読みきかせ

- ・朝の15分間で読みきれの本を選書していくが、子どもたちに聞く力が付いていくと、少し長い本を読みたくなる。続きは先生に読んでもらったりしたいが、先生との関係を築けない、「話を先生が聞いて、続きをぜひ授業でと考えるとくださるならいいが、こちらで授業時間を使ってというのは難しいので、15分の時間の中で簡潔するように考えている」(高木)
- ・数年前まで小学校教諭をしていたが、読み聞かせの選書の工夫などを知らず、ボランティアの方と交流があったら良かったと思う。読みきかせの朝は先生の朝会があって、一緒にいられずどんな本を読んでいるか、どんな反応かさえも知らなかった。
- ・ちょっと前までは10分だった。今は15分で読める本をあげているが、できれば長い本を先生に続きを読んで欲しい。図書館の司書先生もグループに入ってくれて勉強会にも出てきてくれるが、やはり学校組織は難しく、他の先生方にまで浸透していかない。本当に一番いいのは、担任の先生が毎日15分ずつでもいいから長い本を読んでもらう事。
- ・先生がおられる時と全くいない時がある。私たちとしては子どもと一緒に床に座って聞いて欲しい。
- ・学校で図書館の係だが、朝15分の読み聞かせの後でその日読んでいただいた本を記録して感想や学校への要望をメモに書いていただいている。私たち職員はすぐ授業が始まるし、なかなか直接お話する事できない。メモを元にどんな本を読んでいるか職員に回してみて、その後の活動に生かしている。
- ・読みきかせボランティアの仲間うちだけではなく、こういう分科会を縦断的形で作っていただいて、熱意をぶつけていただいきたい。

3 まとめ（助言者の指導を含む）

- ・「飯田おはなしくらぶ おおきな木」は基本的な事をきちんと勉強している。基本的な事をきちんと勉強する事が、子どもたちにいいものを伝えるという事につながっていく。私たちが読み聞かせする目的は、育っていく時に、心も頭も成長をしていかないとあやうくなる。本の持ち方、向き方は本当に大事な事できちんとマスターされているのは本当にすごい事。
- ・高木千奈美さんは、たくさんの事業を大勢の方とやられているのはすごいと思う。今日は勉強会の話は聞けなかったが、これからやろうと思っている方に参考になるように、語って欲しい。
- ・学校での朝の読書が10分では短いというが、学校で午前中の時間を10分とるのはとても大変な事。
- ・その10分間に先生がいないならば、絶対にボランティアが入ってはいけない。何かあった時にボランティアは責任とれない。学校側ときちんと話をするべきだと思う。
- ・子どもにとって私たちのしている事とはなにか。学校にも保育園にも目標がある。喜ばばいい、ただ楽しいだけでなく、作品的に子どもの事を考えてどうとらえているかが大事になってくる。日本人は自分を犠牲にする事を好む。だが子どもがのびのびと生きていける望みを持つ本をぜひ選んでいただきたい。
- ・先生方も楽しんでもらえれば、いろいろ言わなくても子どもたちは楽しむ。そのために何をするか、私の行っている学校では年2回先生と話をする機会がある。私たちからお願いしたり、学校の事を聞けたりできる。そんな機会持てたらいいと思う。
- ・保育園も同様だが、先生方に理解してもらえないと、いい活動ができない。終わったあとちょっと話をする。困ったという話だけじゃなく、こういう事が良かったですと話をしてくれるのはとても大事だと思う。

第15分科会 「みんなとだから読める」～読書会で今を生きる力と喜びを～

助言者 吉田五十鈴（飯伊婦人文庫委員長）

司会者 小林 正子（飯伊婦人文庫）

発表者 辻本千香子（飯伊婦人文庫）



1 発表の概要

飯伊婦人文庫は飯田下伊那地方で様々な形で続いている読書会の聞き書きを2年かけて行い、平成19年に『みんなとだから読めた！～聞き書きによる飯田下伊那地方の読書会の歴史～』を発行した。読書とは、読書会とは何かを求めて聞き書きを始めたが、結果は、自分達が考えていた以上に豊穡なものを包含していた。

(1) みんなとだから読める

①読書会ならば読める

これだけ読書環境が悪くなっている中で若い人たちも本を読み進めることが困難になっている。そんな中でも読書会というみんなで読む「場」に集えば読むことができるようになる。

②中学生、高校生との読書会から

この読書会で10代、70から90代の人たちが同じテキストを一緒に声を出して読むことで、今の中学生、高校生が読めないと言われている文学が方法次第で読めることが解った。このような場である読書会が何らかの形で取り入れられるとよいと思う。

③読書推進は群読で

群読は、他の人の声も無意識に脳に入ってきて、体で理解することができる。失われた読書環境を新しい形で再生させていく一助になると思う。

(2) 飯田下伊那読書会連絡会の継続、発展を

2 討議の概要

(1) 読書会からの報告 8つの読書会からその成り立ち、内容などについての報告があった

(2) 図書館からの報告 高森町立図書館・阿智村公民館図書室から

(3) 群読 ①『平家物語』から ②『みんなとだから読めた！』から

- ・中学生の読む本は、携帯小説かファンタジーもので、読んで欲しい本とはかけ離れている。論語の群読を行ったが生徒に好評であった。同じ本を皆で共有する空間はとても良い事だと思う。
- ・小学校2年生までは本好きの子供が多いが、5年生から中学生にかけて減少していつてしまう。どうしたら本から離れない子供になるのだろうか。
- ・子供が読む本の幅が広い（ドストエフスキーから携帯小説や絵本まで）どう考えたら良いか。
- ・人と人がつながり合う読書会、その場がとても大切であると思った。今後は読み聞かせだけでなく皆で一緒に読む群読を取り入れていきたい。

3 まとめ（助言者の指導を含む）

読書を広げるためには読書会をつくっていく事、その中に群読という読書法を取り入れる事の有効性がますます実証されてきた。しかし、実際には読書会ひとつ、つくる事の困難、今ある読書会を組織していく事が簡単でない現実では、この実践の中で見えてくる真理の光に励まされる。よって、このような取り組みを一つ二つと重ねていく事が重要だと思う。公共図書館の職員が動き出している姿は、改めて現実感をもって迫るものがあり感動させられた。読書こそが人の想像力、創造力をつくっていき、資源のない日本はその人の力が唯一の資源となってきたことを考えると、現状では日本の未来はない、そのために私たちは今の読書推進活動を淡々と続けていきたいと思っている。

限られた時間でしたが、内容豊かな分科会を持つことができた。